

日本語及びタイ語類別詞の対照から見るモノの捉え方の違い

伊藤あゆみ

1. はじめに

1.1 本研究の目的

本研究⁽¹⁾では、日本語類別詞(以下JCL)「本」及びタイ語類別詞(以下TCL)「เล่ม /lêm/」の意味カテゴリー構造の分析及び考察を行う。それを基に、日本語母語話者(以下JNS)及びタイ語母語話者(以下TNS)との間で、類別詞を選択する際のモノの捉え方にどのような違いがあるのか、その一端を明らかにすることを目的とする。

1.2 本研究で扱う類別詞

水口(2004)によると、日本語及びタイ語に見られる類別詞は、数量表現と義務的に現れることから、数量類別詞である。そして、JCLは数量表現とのみ共起するとされる。また、JCLはモノを数える時に数詞と組み合わせて使われることから、助数詞と呼ばれることが一般的である。しかし、本研究では、助数詞の類別詞としての機能に着目して分析及び考察を行うため、類別詞という表現を用いる。類別詞としての機能とは「対象がどのような性質を持つのか—その対象がどのような意味のグループ(範疇)に属するのか—を明確にする機能」のことである(影山 2011)。また、TCLは、数量表現以外に指示詞や、形容詞にも随意的に付与される場合がある(水口 2004)。

(1) 指示詞や形容詞に付与されたTCLの例 (Hundius and Kölver 1983: 173)

a. rôm	khan	níi	b. rôm	khan	sǐi-khǐaw
umbrella	clf	this	umbrella	clf	green
“this umbrella”			“the green umbrella(s)”		

(1)はTCLがない表現も許されるが、Hundius and Kölver (1983)によると、TCLがない場合はそれぞれ、“these umbrellas”、“green umbrellas”という意味になる。水口(2004)はそれに基づき、指示詞や修飾語と共起する場合は、TCLが付くことで1つを表す概念に個別化⁽²⁾され、単数の解釈がされるのではないかとしている。一方、日本語では、指示詞や形容詞とJCLが共起することはない。

上述したように、JCL及びTCLは統語的に違いがある。しかし、本研究では統語的な違いを考察対象とするのではなく、JNS及びTNSが、あるモノを認識して類別詞を選択する際に、そのモノをどのように捉えているかという捉え方の違いについて分析及び考察を行う。よって、TCLについては、類別詞と共に用いられる対象となっているモノであれば、数量表現だけでなく形容詞や指示詞と共に用いられている場合も同様に、用例のデータとして扱う。また、JCL「本」についてだが、「一本化」のような慣用表現は、モノを数える時に数詞と組み合わせて使われるとさ

れる JCL とは異なる性質を持つと考えられることから、本研究の考察対象から外すこととする。

1.3 研究背景

1.3.1 類別詞の選定

Aikhenvald (2000 : 1) によると、「類別詞」とは「名詞の意味的分類を表す言語手段」である。また、類別詞選定の際、JNS 及び TNS はモノの形状や状態などを判断材料にする(飯田 2009, 小林・富田 2011)。例えば、鉛筆を数える際、JNS は形状が細長いという特徴に着目し、JCL「本」を、TNS は中が詰まっているという特徴に着目し、TCL「 $\text{u}^w\text{h}^j/\text{th}^{\text{e}}\text{ŋ}^j$ 」を選択する(小林・富田 2011)。

1.3.2 問題提起

日本語もタイ語も類別詞を持つ言語だが、どのような対象にどの類別詞を用いるかという、類別詞の意味カテゴリーは同じではない。JCL「本」は具体的なモノから抽象的なモノまで幅広く拡張している類別詞である。「本」の意味拡張に関する先行研究には、レイコフ(1993)、大堀(2002)、西光(2004)などがあるが、「本」が用いられる対象の一部が扱われているに過ぎない。また、TCL「 $\text{l}^{\text{e}}\text{m}/\text{l}^{\text{e}}\text{m}/$ 」については、JCL「本」で捉えられるモノの一部が対象に含まれるため、「本」と 1:1 対応で結びつけられたり、包含関係にあると捉えられてしまいがちだが、実際は両類別詞の対象とされるモノの全体像は異なっており、JNS と TNS は同じモノに対して、異なる捉え方をしていると考えられる。小林・富田(2011)は TCL の使い分けの基準について説明しているが、十分であるとは言えない。また、意味拡張についても、先行研究では詳述されていない。また、日本語及びタイ語学習においても、類別詞が実際の言語活動でどのように使用されているかを把握する必要があるが、現状では教科書にも類別詞について詳しく記載されておらず、学習者は各々の名詞にはこの類別詞を使用するというように暗記していくしかないのが現状であるとされる(北川 2005, 小林・富田 2011)。よって、JCL 及び TCL の構造化された意味ネットワークについて分析する必要があると考えられる。また、その拡張関係を把握し、JNS 及び TNS のモノの捉え方の違いを明らかにすることが教授法を考える上での一助にもなると考えられる。

2. 日本語類別詞「本」

2.1 先行研究

レイコフ(1993 : 125)によると「日本語の分類詞『本』は、最も一般的な用法では、長くて細いもの(棒、つえ、鉛筆、ろうそく、木、ロープ、毛、など)を類別する。この中でも、堅くて長細いものが最も典型的な例である」。さらに「細長いもののイメージ・スキーマ」から複数の動機付け⁽³⁾によって意味拡張が生じていて、「本」で表される対象のカテゴリーはそうした拡張の連鎖を成した意味カテゴリーであるとされ、それは放射状カテゴリーと呼ばれている(レイコフ 1993, 大堀 2002, 西光 2004)。また、大堀(2002)は図1のような物体を「本」の基本的イメージ・スキーマとし、それを伸縮させる変換の操作によって様々なモ

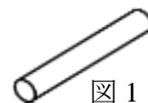


図 1

ノへの拡張を理解することができるとしている。先行研究に基づき、放射状カテゴリーの一例を図2に示す。

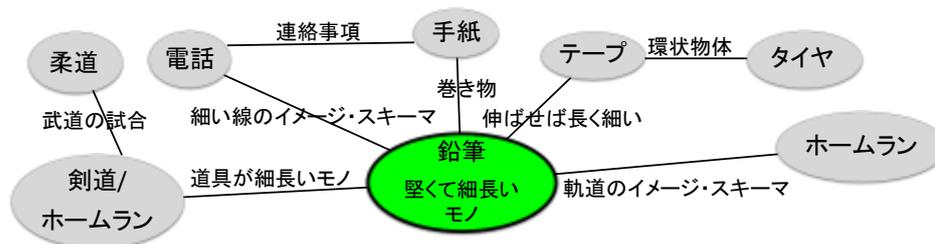


図2 放射状カテゴリーの模式図 (大堀 2002 を参考に作成)

2.2 コーパスを使用した日本語類別詞「本」の分析・考察

本節では、より包括的に「本」で捉えられるモノの意味拡張のカテゴリー構造について考察したい。本研究では、「日本語話し言葉コーパス」及び「現代日本語書き言葉均衡コーパス『中納言』」からデータを抽出した。以下では、それらの意味拡張について考察する。

まず、具体的なモノの意味拡張についてだが、鉛筆、針、矢などは、堅くて細長いモノであることから、「本」で捉えられる典型的なモノであると考えられる。また、レーザー光や虹は光や気体などが形作っているモノであるが、線状に見えるため、「本」で類別されると考えられる。フィルムはカメラに収められている際は巻いてあるが、写真を現像したりする時は伸ばして使用されるため、その際の形状が細長いモノのイメージ・スキーマに合致する。さらに、輪ゴムなども環状である細い輪の部分に着目することにより、「本」で捉えられていると考えられる。

足や、腕、骨などの身体部位も細長いイメージ・スキーマを持つモノであることから、「本」が用いられていると考えられるが、細長い身体部位からメタファーによって拡張したモノも見られた (ハンドクレーンなど)。さらに、手や太股は、腕や足の一部に当たるため、メトニミー⁽⁴⁾による拡張であると考えられる。また、ワクチンなどは液状で「本」では捉えられないように見えるが、投与する際に使われる注射器のメトニミーによって拡張したと考えられる。さらに、ギターなどは弦が演奏において重要な役割を果たすため、弦のメトニミーによる拡張だと考えられる。また、容器のメトニミーによるモノも見られた。具体的なモノの意味拡張の一例を図3に示す。

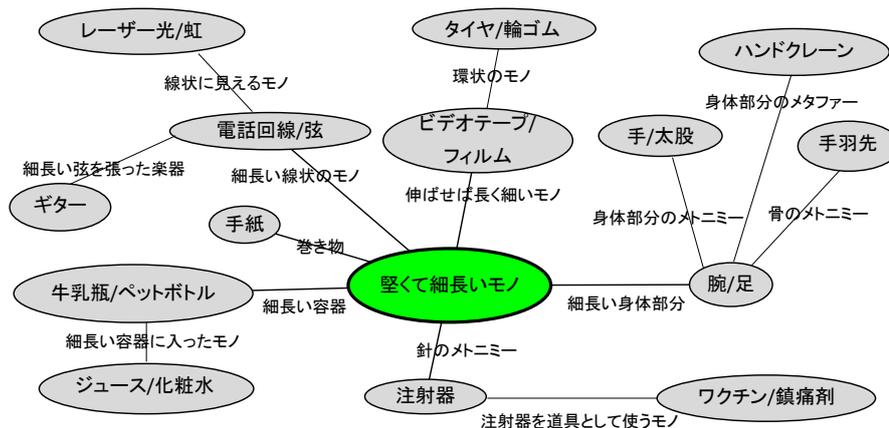


図3 具体的なモノの意味拡張図

次に、すぐには細長いモノと関連づけることが難しく見える抽象的なモノに関する拡張例を見ていく。まず、ファクス (による通信) などに拡張した用例が見られた。大堀 (2002)、レイコフ (1993) によると、電話 (の通話) は電話線が細い線のイメージを持つものであることから、「本」

が用いられている。ファクスも同様に電話線を用いた通信である。さらに大堀（2002）は、手紙が連絡手段であることから、それが他の連絡手段全般にも拡張されたという一般化による動機づけも考えられるとしている。ファクス（による通信）などにも同様の動機づけが働いていると考えられる。また、レイコフ（1993）は電話（の通話）やメール、テレビ番組には、コミュニケーションに対する導管メタファーによる動機づけが働いているとしていた。話者から視聴者へのコミュニケーションが行われていると考えられるため、同様の動機付けがドラマや芝居などにも働いていると考えられる。

次に、大堀（2002）は、原稿に「本」が用いられることについて、手紙がもともと巻物の形をしていて、そこから書き物全体への一般化によって拡張したと説明していたが、シナリオや小説など他の書き物についても同様の説明ができると考える。ただし、ここでいう「書き物」は書かれた紙や冊子などの具体物ではなく「書き物の内容」を指すと考えられる。

また、ダイビングのダイブ数を数える用例については、ダイビングで必要不可欠な酸素の入ったタンクのメトニミーによる拡張だと考えられる。また、レイコフ（1993）、大堀（2002）において、ホームランなどが道具のバットからのメトニミーによる拡張とされたのと同様に、スキージャンプもスキー板のメトニミーによる拡張として捉えることができる。さらに、飛んだジャンプの軌道のイメージ・スキーマ変換によるモノであるとも考えられる。

フェリーの運航数を「本」で数えている用例も見られた。電車やバスの運行数については、線路や道路が細長く続いているモノであることによる動機づけ（大堀 2002）と、ダイヤの線を数えていることによる動機づけ（飯田 2005）が挙げられる。フェリーも決まった航路を通るため、航路を細長いモノとイメージ・スキーマ変換することも可能かもしれないが、フェリーについてはダイヤの線によって運行数を数えるという動機づけからの拡張の方がより自然だと考えられる。

また、論文や小説などについては、大堀（2002）で挙げられていた仕事や原稿と同様に、汎用メタファーによる動機

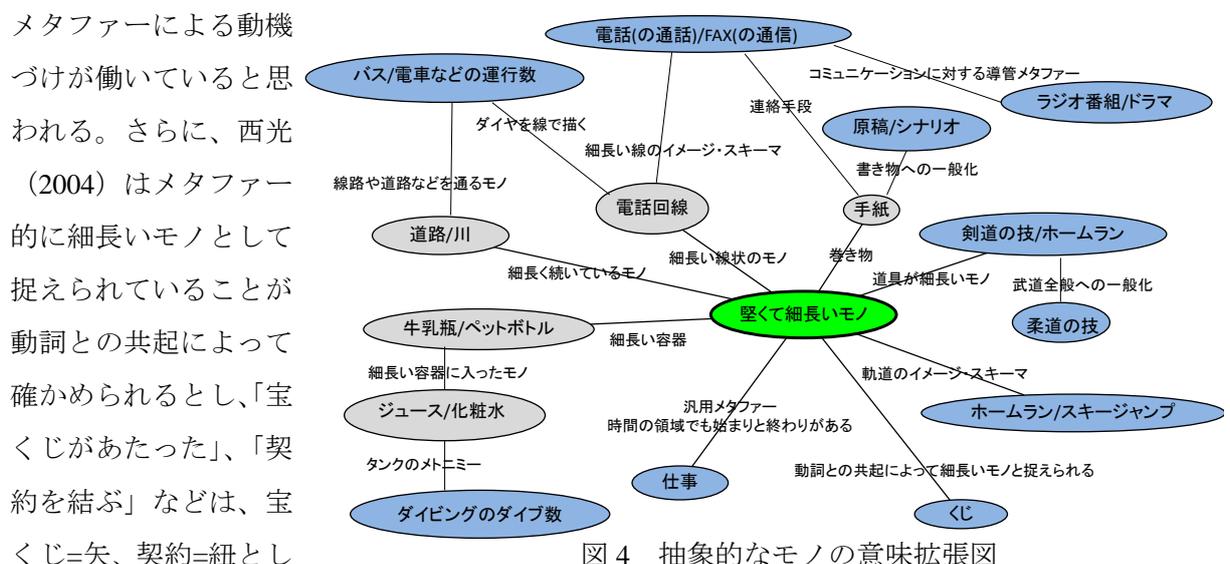


図4 抽象的なモノの意味拡張図

て捉えることにより、「本」が用いられているとしている。懸賞なども動詞「あたる」と共起することから、同様の動機づけが働いていると考えられる。抽象的なモノの意味拡張の一例を図4に示す。

上述したように、「本」の意味拡張のカテゴリーは放射状カテゴリーだが、様々な動機づけによって拡張していることがわかる。また、プロトタイプから直接、意味拡張しているモノだけでなく、2段階、3段階と連鎖を成して拡張したモノもある。また、具体的なモノだけでなく、抽象的なモノまで幅広く拡張し、1つのモノに対して複数の動機づけが絡んでいるモノもある。よって、JNSは具体的なモノであれ、抽象的なモノであれ、イメージ・スキーマ変換やメタファー、メトニミーなどの認知能力を使って「細長いモノ」として対象を認識した場合、その対象を「本」を用いて類別し、数えていると言える。

3. タイ語類別詞「เล่ม /lêm/」

3.1 先行研究

傘、河川、針、蠟燭、糸、ペンなどを数える際、日本語では、これらのモノ全てにJCL「本」が用いられる。そこで、JNSが仮に、針や蠟燭に対するTCLは「เล่ม /lêm/」であると知ったとしよう。日本語では針や蠟燭と同様に傘や河川、糸やペンにも「本」が用いられるため、タイ語でもこれらのモノ全てに対して「เล่ม /lêm/」が用いられると認識してしまう可能性がある。しかし、実際、タイ語では対象となるモノによって、様々なTCLが用いられる。よって、JNSはこれらのモノを大雑把に細長いモノと捉えてJCL「本」を使っているのに対し、TNSは別の捉え方をしていることが考えられる。では、TNSはこれらのモノをどのように捉えて、TCLを使い分けているのだろうか。小林・富田(2011)は、TCLの使い分けの基準について次のような例を挙げている。

「คัน/khan/」: 持つところがあるもの (傘、スプーン、フォーク、しゃもじなど)

「เล่ม /lêm/」: 先が尖っているもの (蠟燭、針、はさみ、ナイフなど)

「ด้าม/dâam/」: 握る部分があるもの (ペン、万年筆など)

「แท่ง/thêng/」: 中が詰まっているもの (鉛筆、チョークなど)

「สาย/săay/」: 細長く続いているもの (道路、河川など)

「เส้น/sên/」: 平面的で細長く、線上の形状をもつもの (糸、紐、ロープ、毛髪など)

しかし、実際には「คัน/khan/」で数えられるものには車があったり、「เล่ม /lêm/」で数えられるモノにはノートがあったりすることから、この基準では十分であるとは言えない。

また、Jaturongkachoke (2001)はTNSにインタビュー調査を行った結果、多くのインフォーマントが「เล่ม /lêm/」で捉えられるモノのプロトタイプは「書籍」であると答えたとしている。また、プロトタイプとノンプロトタイプの間で共通する特性についても調べたが、それを見出すことはできなかったとしている。その体系について理解するためにはメタフォリカルモデルを使用

して考えることが重要であるとされているが、意味拡張の動機づけに関しては詳述されていない。

3.2 質問紙調査を用いたタイ語類別詞「เล่ม /lêm/」の分析・考察

本研究では、TNS7名（18歳～38歳の女性5名、36歳の男性2名、出身地はバンコク5名、ムクダハーン1名、ノンブアランプー1名）を対象に、Thai National Corpusにおいて、「เล่ม /lêm/」で捉えられていた73のモノをリスト化し、TCLの使い方について質問紙調査を行った。質問は以下の5つである。73のモノのリスト及び質問①～④に対する回答の集計結果を表1に示す。質問①及び③の回答に挙げられなかったモノについては「เล่ม /lêm/」のみを使うと判断した。

- ① リストの中に、TCL「เล่ม」で数えることができないモノはありますか。もし、ある場合、それはどれですか。
- ② ①で挙げたモノについて、どんなTCLを使うかを書いてください。
- ③ リスト中に、TCL「เล่ม」を使って数えることもできるが、「เล่ม」以外のTCLも使えるモノはありますか。もし、ある場合、それはどれですか。
- ④ ③で挙げたモノについて、「เล่ม」の他にどんなTCLを使うことができるかを書いてください。
- ⑤ 誰かにTCL「เล่ม」を教えるとしたら、どんな例文を使いますか。TCL「เล่ม」を使った例文を1つ作ってください。

表1 質問紙の質問①～④に対する回答の集計結果（単位：人）

タイ語	日本語	เล่มのみ を使う	①	②	③	④
1 เกวียน	牛車、馬車	5	2 คັນ			
2 เข็ม	針、ピン、ブローチ	5			2 แท่ง, อัน	
3 เทียน	蠟燭	7				
4 เทียนดวงน้อย	小さい円形の蠟燭	7				
5 เรื่อง	話、物語、叢書	1	6 เรื่อง			
6 เอกสาร	文書、公文書、 文献	2	2 ฉบับ, แผ่น, ชุด		3 แผ่น, ชุด, ฉบับ	
7 เอกสารคู่มือ	手引き、案内書	5			2 ฉบับ, แผ่น, ชุด	
8 แฟ้ม	ファイル、 バインダー	4	3 โบบ, แฟ้ม			
9 ไดอารี่	日記、日記帳	7				
10 กฎหมาย	法律	2	4 ฉบับ, บท		1 ฉบับ	
11 กฎหมายตราสามดวง	三印法典	3	4 ฉบับ, บท			
12 การ์ตูน	漫画	5	1 เรื่อง, ตัว		1 เรื่อง, ตอน	
13 คัมภีร์	経典、経文	5	1 คัมภีร์		1 ฉบับ	
14 คัมภีร์ไบเบิล	聖書、バイブル、 経典	6			1 ฉบับ	
15 คู่มือ	手引き、案内書	5			2 ฉบับ, ชุด	
16 ดาบ	刀、劍	7				
17 ดาบปลายโค้ง	弓なりの刀、劍	7				
18 ดาบสั้น	短刀、短劍	7				
19 ดิกชันนารี	辞書	7				
20 ตาลบัตร	シユロ扇	7				

質問⑤でインフォーマントが用いるモノは想起しやすいモノ、すなわち、プロトタイプに近いものであることが予想される。実際に用いられたモノはสมุด(ノート)2名、หนังสือ(書籍)3名、ปฏิทินหลวง(国家のカレンダー)1名、เทียน(蠟燭)1名である。ノートや書籍が多く、これは Jaturongkachoke (2001) が示したプロトタイプにも一致するが、他の質問への回答から、それ以外にもプロトタイプに近い

21	ตำรา	教科書、教材	4			3	ฉบับ、ชุด、ตำรา
22	นวนิยาย	近代小説	3	2	เรื่อง	2	เรื่อง、ตอน
23	นสพ.	新聞	2	5	ฉบับ		
24	นิตยสาร	雑誌、定期行物	3	1	ฉบับ	3	ฉบับ
25	นิพนธ์	著作、著述、作品	6			1	ฉบับ
26	นิยาย	神話、物語、小説	4	2	เรื่อง	1	เรื่อง
27	นิยายแปล	翻訳小説	5	1	เรื่อง	1	เรื่อง
28	บันทึก	記録、記載、メモ、日記	5			2	ฉบับ、เรื่อง
29	บันทึกโบราณ	古い(古代の)記録帳	5			2	ฉบับ、เรื่อง
30	ปฏิทิน	カレンダー	4	2	ฉบับ、แผ่น、อัน	1	แผ่น
31	พจนานุกรม	辞書、語彙集	7				
32	พจนานุกรม	辞書、辞典	7				
33	พระไตรปิฎกสากล	パーリ三蔵	7				
34	พระราชบัญญัติ	勅令、法令、条例	6	1	ฉบับ		
35	พ็อคเก็ตบุ๊ค	ポケットブック	7				
36	มีด	刀、ナイフ	6			1	ด้าม
37	มีดโกน	かみそり	5	1	อัน	1	ใบ
38	มีดคัตเตอร์	カッター	5	2	อัน、ด้าม		
39	มีดพก	ポケットナイフ	5			2	อัน
40	มีดอีโต้	鉈、こま切り包丁	7				
41	ราชกิจจานุเบกษา	官報	5	1	ฉบับ	1	ฉบับ
42	วรรณกรรม	著作、作品、文学作品	3			4	ฉบับ、เรื่อง
43	วารสาร	定期行物、新聞雑誌	2	1	ฉบับ	4	ฉบับ
44	วิทยานิพนธ์	学術論文	4	2	ฉบับ、เรื่อง	1	เรื่อง
45	สมุด	ノート、帳面、冊子	7				
46	สมุดเก็บภาพ	アルバム	7				
47	สมุดเงินฝาก	預金通帳	7				
48	สมุดเยี่ยมชม	ゲストノート	7				
49	สมุดโน้ต	ノート	7				
50	สมุดใบถอนเงินฝากออมทรัพย์	預金通帳	7				
51	สมุดจดเบอร์โทรศัพท์	電話番号録	7				
52	สมุดบัญชี	家計簿、簿記帳	7				
53	สมุดบัญชีเงินฝากธนาคาร	預金通帳	7				
54	สมุดบัญชีธนาคาร	銀行通帳	7				
55	สมุดบันทึก	記録帳	7				
56	สมุดบันทึกเก่าๆ	古い記録帳	7				
57	สมุดพก	手帳	7				
58	สมุดสเก็ตช์	スケッチブック	7				
59	สัญญา	条約、協定、約束、契約	2	4	ฉบับ、ข้อ	1	ฉบับ
60	หนังสือ	本、書籍	7				
61	หนังสือเรียน	教科書	7				

モノがあることが示唆された。それはインフォーマントの多くが「เล่ม /lêm/」のみを使うとしたモノで、ノートや通帳などの冊子や、蠟燭、刀剣類である。しかし、一見しただけでは、これらの間に、共通性を見いだすことは難しい。そこで、Hundius and Kölver (1983) の記述を見ると、「เล่ม /lêm/」は水牛車にも使われ、類別は車輛の特徴的な長い棹によって動機づけられているとされる。さらに、書籍などにも使われるが、従来、本、教科書などは、ヤシの葉を束ねたモノから成っていたとされている。また、三保・三保 (1998) は、ヤシの葉写本の材料となるトン・ラーンの葉は掌状葉であり、切り取られた時の外見は木刀のような形態をしていると述べている。よって、ヤシの葉を束ねたモノを介して共通性が見出せる。それを基に、「เล่ม /lêm/」の意味拡張を図5に示す。

62	หนังสือการ์ตูน	漫画本	6		1	เรื่อง
63	หนังสือคาถา	呪文、 経典の章節(の本)	7			
64	หนังสือคู่มือ	手引き、案内書	7			
65	หนังสือตำรา	教科書、教材	7			
66	หนังสือนวนิยาย	近代小説	6		1	เรื่อง
67	หนังสือนิทาน	物語、説話、故事	7			
68	หนังสือนิยาย	神話、物語、小説	6		1	เรื่อง
69	หนังสือปกอ่อน	ペーパーバック、 軟表紙の本	7			
70	หนังสือประวัติศาสตร์	歴史の本	7			
71	หนังสือพิมพ์	新聞	4	3		ฉบับ
72	หนังสือวิชาการ	専門書、学術書	7			
73	หนังสืออ่านเล่น	読み物、中間小説	6		1	เรื่อง

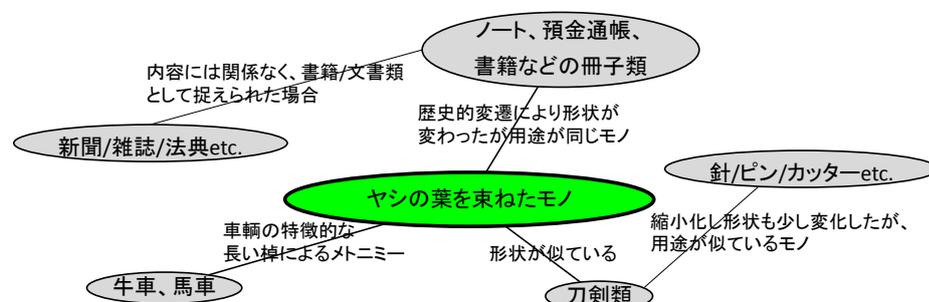


図5 「เล่ม/lêm/」の意味拡張図

書籍についても物理的に捉えた場合は「เล่ม/lêm/」を用いるのに対し、内容に着目した場合は「เรื่อง/rûang/」を用いるなど、抽象的な側面が含まれると別の TCL が用いられていた。このことから、「เล่ม/lêm/」は物理的な形状に着目して使用されていると考えられる。

4. 全体的考察

4.1 日本語類別詞「本」及びタイ語類別詞「เล่ม/lêm/」の対照から見るモノの捉え方の違い

本節では、「本」と「เล่ม/lêm/」の分析を基に、JNS 及び TNS のモノの捉え方の違いについて考察したい。まず、「本」と「เล่ม/lêm/」で捉えられるモノは、たまたま重なりを見せるモノもあるが、重なっていないモノも多数あることがわかった。また、「本」及び「เล่ม/lêm/」で捉えられるモノの意味拡張の仕方にも違いがあった。「本」は具体的なモノだけでなく、抽象的なモノにまで幅広く拡張しているのに対し、「เล่ม/lêm/」は具体的なモノを対象としている。さらに、プロトタイプについても違いが見られた。このプロトタイプの違いが、両類別詞の意味拡張の仕方の違いにも繋がっていると考えられる。JNS は具体的なモノから抽象的なモノまで幅広く同じ JCL を使うために、詳細な特徴は捨象し抽象化してモノを捉えているのに対し、TNS はプロトタイプとそのモノの間に物理的な側面で共通する特性があるかどうかを見ており、抽象的なモノになると別の TCL を用いることから、より詳細な特徴に着目してモノを捉えていることが示唆される。

「เล่ม/lêm/」で捉えられるモノのプロトタイプは「ヤシの葉を束ねたモノ」であるとした上で、「เล่ม/lêm/」のカテゴリーを見ると、いずれも具体的なモノにのみ拡張していることがわかる。また、質問紙調査の結果、冊子の形状をしたモノでも、新聞や法律関係の文書など出来事の記録等が書かれているかどうかに着目した場合は「ฉบับ/chabàp/」が用いられていた。さらに、小説などの

4.2 日本語母語話者及びタイ語母語話者のモノの捉え方の違いから予測される日本語及びタイ語学習上の問題点及び教授法への示唆

学習者は両類別詞の意味をイコールで結びつけてしまったり、両類別詞が包含関係にあると捉えてしまう可能性があり、正しい意味カテゴリーを理解することは難しいと考えられる。よって、学習者は両類別詞をイコールで結びつけたり、上位カテゴリー—下位カテゴリーとして捉えることはできないことを理解し、カテゴリーの再編成をする必要があると考えられる。そのために教授の際には、まず両類別詞で捉えられるモノのカテゴリー構造の全体像には違いがあるということを理解させることが重要であると考えられる。その上で、その類別詞で捉えられるモノのプロトタイプを示したり、例を用いて意味拡張の動機づけに触れたり、イメージ図式を用いてその類別詞がどのようなカテゴリー構造を成しているのかを示すなどの工夫をする必要があると考える。

5. 今後の課題

JCL「本」で捉えられるモノに用いられる TCL は「เล่ม /lêm/」の他にも多数ある。よって、他の TCL の分析も含めて対照を試み、JNS 及び TNS のモノの捉え方の違いについてより深く論じる必要があると考えられる。また、今回、TCL に関する質問紙調査においてリストに挙げたモノの中には、「ไดอารี่ /dai²aa²ri/」（日記、日記帳）と「บันทึก /banthúk/」（記録、記載、メモ、日記）のように日本語訳を見ると似ているモノであっても、TCL の使い方には違いが見られるモノがあった。よって、名詞に関する考察や、インフォーマントに対する追跡調査によって、詳細な違いについても分析する必要がある。さらに、今回、分析したような類別詞の意味拡張を実際に、学習者に対して提示する際には、学習者のレベルに応じた用例の提示や説明を行う必要があるため、学習・教授の方法についても今後、考えていく必要があると考えられる。

注

- (1) 本稿は北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院における修士論文の一部に、加筆、修正をしたものである。また、1章～3章の内容の一部は、伊藤（2014）が基になっている。
- (2) 個別化とは、ものを数や量に分割する機能のことである（水口 2009）。
- (3) 動機づけとは、新しい形式を既存の知識ネットワークに適合させようとするとき、最もふさわしい推論を可能にする思考形態のことである（辻 2013）。
- (4) メトニミーとは、単一領域内の要素の隣接性に基づく比喻のことである（辻 2013）。

参考文献

- 飯田朝子（2005）『ちくまプリマー新書 018 数え方でみがく日本語』、筑摩書房
 飯田朝子（2009）「現代日本語の助数詞—ものの捉え方で決まる数え方—（特集 助数詞・類別詞

- について考える)』『日本語学』28 (7)、明治書院、pp.32-41
- 伊藤あゆみ (2014) 「日本語助数詞とタイ語類別詞の対照から見るモノの捉え方の違い—日本語助数詞「本」の意味拡張をベースに—」『日本認知言語学会論文集』14、日本認知言語学会、印刷中
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』、東京大学出版会
- 影山太郎 (編) (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』、大修館書店
- 北川幸子 (2005) 「日本語教育における助数詞の扱いの問題点—助数詞「本」を例に—」『日本語教育方法研究会誌』12 (1)、日本語教育方法研究会、pp.54-55
- 小林尚美・富田紘央 (2011) 「日本語助数詞とタイ語類別詞の対照—文化や範疇化の視点の違いに着目して—」『東海大学紀要, 国際教育センター』(1)、東海大学国際教育センター、pp.29-41
- 辻幸夫 (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』、研究社
- 西光義弘 (2004) 「類別詞と認知様式の相関に関する理論的考察」西光義弘・水口志乃扶 (編) 『類別詞の対照』、くろしお出版、pp.23-38
- 水口志乃扶 (2004) 『「類別詞」とは何か』西光義弘・水口志乃扶 (編) 『類別詞の対照』、くろしお出版、pp.3-22
- 水口志乃扶 (2009) 「類別詞から日本語を考える (特集 助数詞・類別詞について考える)」『日本語学』28 (7)、明治書院、pp.22-31
- 三保忠夫・三保サト子 (1998) 「タイにおける貝葉写本 Palm Leaf Manuscripts について」『島根大学教育学部紀要. 人文・社会科学』32、島根大学、pp.7-19
- レイコフ, G. (著) 池上嘉彦・河上誓作他 (訳) (1993) 『認知意味論 - 言語から見た人間の心』、紀伊國屋書店 (原著 1987 年)
- Alexandra Aikhenvald.(2000) *Classifiers: A Typology of Noun Categorization Devices*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Harald Hundius and Ulrike Kölver.(1983) Syntax and semantics of numeral classifiers in Thai, *Studies in Language*7. pp.165-214
- Ketkanda Jaturongkachoke.(2001) Cognitive Models of the Thai Classifier System, in *Papers from the sixth Annual Meeting of Southeast Asian Linguistics Society*, ed. K.L. Adams and T.J. Hudak, Tempe, Arizona, pp.249-267

コーパス

- 国立国語研究所 (2009) 現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」
- 国立国語研究所・情報通信研究機構・東京工業大学 (2004) 日本語話し言葉コーパス
- Chulalongkorn University(2007) Thai National Corpus